受賞者の業績

林（はやし）　せつ氏　50歳（保健婦・宮城県）

昭和38年、交通機関もない純農村地域の蔵王町は、妊産婦の栄養状況も悪く過重労働も重なり、母子を取り巻く環境は劣悪であった。着任後は、住民とのパイプ役の保健協力員を設置し、若妻学級や栄養指導、訪問指導を積極的に行い、当時全国平均の2倍にも及んでいた乳児死亡率は減少し、62年からはゼロとなっている。現在は、「こころ」を重視した母子保健活動を目指し努力を続けている。

大場（おおば）　禮子（れいこ）氏　41歳（保健婦・秋田県）

「人間形成の基礎は母子保健」との認識に基づき、象潟町で児童相談所、臨床心理員等多方面の協力を得て昭和52年より「幼児健康相談」を開始し、充実を図ってきた。自主教材活用のむし歯予防活動や、祖母を対象とした初孫教室等には、その独自のアイデアが反映されており、現在、関係機関のコーディネーターとして地域の母子保健事業推進に果たす役割は大きく、今後の活躍が期待される。

舟山（ふなやま）　武子（たけこ）氏　42歳（保健婦・山形県）

豪雪の山間へき地である小国町役場に昭和45年着任。以来、「家庭訪問は保健婦活動の原点」と地道に全妊産婦指導、全乳児訪問指導を続けている。実習を取り入れた離乳食指導やグループワークを取り入れたおばあちゃん教室は、過疎化や少子化の進行にもかかわらず受講率が増加している。現在は、関係各方面とのネットワークによる母子保健事業の展開を目指して活躍中である。

関口　美代子氏　54歳(保健婦・千葉県)

東京のベッドタウンとして人口急増に伴う環境の急変、都市化が進む習志野市で、32年にわたり母子保健活動の基盤づくりと体系化を精力的に図ってきた。特に設置に力を注いだヘルスステーションは、学校やＰＴＡ等既存組織との連携のもと年々増設され、地域に根ざした保健活動の拠点として機能している。このような活動は常に関係者の関心を集め、ますますの活躍が期待されている。

小林　カツ子氏　52歳(栄養士・新潟県)

保健婦･助産婦との連携を密にして、母親学級･乳幼児健診などで母子の栄養改善、健康づくりなどの母子保健事業の発展に尽力。特に母親の貧血が多いことを憂慮し、各地区を巡回して貧血、妊娠中毒症の予防などを指導し、効果をあげている。また、糸魚川市内の各地区で親子ふれあい料理教室を開催し、よりよい食生活の確立を目指して保育所の給食担当者の資質の向上に努力している。

依田　育子氏　41歳(保健婦・山梨県)

昭和47年、六郷町に着任。以来、愛育班の育成、班員教育の充実を図り、組織的な母子保健活動の基盤づくりに尽力。妊娠中からの一貫した母子管理カードの作成をはじめ、乳児健診未受診児の100％家庭訪問、アンケート調査によって受講者の意見を取り入れた育児栄養教室、妊婦教室等を実施。常に建設的な視野に立ち、住民重視の活動を行っている姿は、広く理解と信頼を得ている。

樋井　博子氏　51歳(保健婦・長野県)

石川県、大阪府で未熟児・妊婦対策に活躍した後、昭和49年松川村に奉職。当時、村ではただ一人の保健婦でありながら、独自の産褥婦家庭訪問記録票を作成し、母子保健推進員との密接な連携のもと、母子問題の早期解決に努めた。また、乳幼児健診の見直しを図り、57年からは乳児死亡率ゼロを実現。う歯予防にも積極的に取り組み、平成元年度には県内で最優秀の実績をあげている。

金本　恵美子氏　43歳（保健婦・滋賀県）

昭和48年、安土町役場に奉職。母子健康センターを拠点として、助産婦、母子保健指導員との連携のもと、子育て部会の設置、０歳から15歳までの一貫した健康記録票を活用した指導、嫁姑のトラブル対策としての「おばあちゃんの育児学級」の開催など、常に子育ての環境づくりを指向し続けている。62年には「地域ぐるみ子育て推進会議」を結成。今後の活躍が大いに期待されている。

金集　百合子氏　45歳（歯科衛生士・高知県）

「幼児期に身についた生活習慣は、一生の健康にかかわる大切なもの」との信念のもと、歯科保健活動を中心に、中央保健所で12年間にわたって住民の健康を守り続けてきた。指人形や歯みがきカレンダーを活用した指導法は「金集式歯の衛生教室」と称され、う歯数の減少に大きく貢献した。保母への歯科保健指導、在宅歯科衛生士の育成などの積極的な活動は、常に関係者の注目を浴びている。

山下　久美子氏　37歳（保健婦・熊本県）

保健婦不在の免田町に昭和50年に赴任。乳児全戸訪問を目指して、自転車で母乳の必要性を指導して回る。行動発達チェック、独自の健診票の作成、歯ブラシの配布など幼児健診の充実を図り、早期問題発見体制づくりに貢献。今日では乳幼児健診の受診率100％を実現している。55年からは、脳性まひ児をもつ親の要望にこたえ、地域でのリハビリテーションを実施し、成果をあげている。

小笠原　玉代氏　42歳（保健婦・大分県）

乳児死亡率の高かった国見町で、乳児死亡率ゼロを目指して、育児学級・育児相談所の開設、訪問事業の実施、母子保健推進員の組織づくりなど、地道な活動を精力的に続け、昭和55年以来、乳児死亡ゼロが続いている。また、東国東郡内の母子保健推進員のレベルの均一化と、質の向上の必要性を痛感し、郡母子保健大会開催を提唱し、その推進力となるなど、今後の活躍が期待されている。

江　﨑　教　子氏　53歳(保健婦・鹿児島県)

無医・保健婦未設置地区という奄美大島、屋久島など交通事情の悪い離島で、地域に密着した母子保健活動を積極的に推進し、家庭訪問事業、母児搬送の体制づくりに奔走して、当時の保健衛生環境の改善に大きく貢献。また、「太陽の子運動」が展開されると、推進員の設置、人材育成、事業の円滑な推進に努め、地域住民の意識の啓発、知識の普及向上に尽力した功績は高く評価されている。

唐　眞　佑　子氏　46歳(保健婦・沖縄県)

八重山群島の駐在保健婦として活動を開始し、当時、交通機関や生活環境の整備されていない孤島で、妊婦・乳児の健康管理など母子保健の向上に活躍。また、本土復帰に伴い、専門医の皆無に等しい八重山地区で、諸制度の実施、医療事情の改善、乳幼児一斉健診、発達診断、心疾患児健診等管理体制の継続と充実を図るなど、総合的な母子の管理と事後管理の徹底を図り、多大な成果を上げている。

吉　見　芳　子氏　51歳(助産婦・横浜市)

保健所助産婦として一貫して自然分娩・母乳育児の大切さを唱え、妊産婦管理の充実など、地域の母子保健の向上に尽力。また、核家族の多い大都市で孤立した母親が増えるなか、育児不安の解消、豊かな子育てのための仲間づくりなど、地域の子育てグループづくり、両親教室の開催等を精力的に行ったり、母親教室のＯＢ会、子育てひろばなど、子育てのネットワークづくりに励んでいる。

田　中　妙　子氏　53歳(保健婦・名古屋市)

乳幼児や母性の個別指導、地域の自主グループの組織化に努め、常に名古屋市の母子保健活動推進の原動力となり、未受診者対策のため、妊娠中から３歳児までの母子全数管理システムを導入するなど、その活動が高く評価されている。また、事業所の多い中区では人工妊娠中絶が非常に多いため、人工妊娠中絶ゼロを目指して婚前・新婚学級を開催するなど、母性保健の知識の普及に尽力。